鍵としての落穂
——Kate Chopinの詩——

森田　孟

『目覚め』*The Awakening* (1899) の作者は詩も書いていた。書いたとは言っても、作者の生前に雑誌に発表されたものは短詩2篇だけであり、もう2篇、同じように短い詩が、地元の作家クラブの刷り物に掲載されたのみである。しかし、パー・セイヤーステッドは、ケイト・ショパンの全作品集を編集・公刊[1]した際、彼女の草稿・原稿類を精査・点検した挙句、上記の4篇と、すでに30数年前にランキンがショパンの伝記研究を出版[2]した時に短篇作品と共に選んで世に出していた6篇の詩と共に、自ら新たに10篇の詩を選び出し（それは初めて公刊されたことになった）、計20篇の詩作品を、その全作品中に収録した。ケイト・ショパンの「詩」として作品集に収められる状態のものが、20篇だったということである。

ショパンが詩も書いていたというのは、やはり大いに語弊があるだろう。が、それでもケイト・ショパンの詩作品である。モーパッサンを始めとするフランス作家の多くを翻訳しながら、詩情の滲み出る美しい簡潔な文体を駆使して、長篇小説2作、96篇の短篇作品やスケッチ、13篇のエッセイや批評文を残した作家の、すべて短いものばかりとはいえ、20篇の詩である。その姿は是非みてみたい。それらを収録順に番号を付けて、以下、訳出・紹介したい。各作品にその都度附した説明は、セイヤーステッドによるものである。

(1)　もしかしてそうだったのなら　If It Might Be

もしかして　そなたが私の生命(いのち)を本当に必要としたのなら
今　即座に私は　希望と恐怖との
この格闘を終らせて　喜んで生命の終りに向き合うことでしょう
唯　死がこれ程甘美なものだと判って不思議に思うでしょうが。

もしかして　そなたが私の愛を本当に必要としたのなら
そなたを深く愛することが　私の生涯の心を籠めた仕事なのだと証明
　されるでしょう
ずっといつも　私は優しく見守り続けるでしょうし
生きることを全く　幸福だと看做すでしょうに。
――――― C. 727。*America* (Chicago, Jan. 10, 1889) 初出。

(2)　霊魂(プシューケー)の哀歌　Psyche's Lament

おお　真暗闇で我が目を覆わせよう
　私はもはや　光が欲しくない！
太陽神(ヘーリオス)が燃え立つ空にあっても
　昼日中を明るく輝かせられないのだから
私が昼を失っても私に夜が訪れなかったように！

おお、憂鬱な優美よ、闇に包まれた魅力よ、
　もう一度私に戻ってきておくれ！
私を見棄てたりしないで、両腕を虚しく広げたまま
　この上なく暖かな〈愛〉が在った虚空を
捜し求め　摑もうと骨折りながら　無駄に終りたくないのだもの。

今や脈打ちながら私の心に入ってくる心はない
　彼が去ってしまったのだから。私には見える
私には感じ取れる　輝いている呪われた光だけは——
　それが私の〈愛〉を消し去ったのだ。
おお〈愛〉よ、おお〈神〉よ、おお〈夜〉よ　私に戻ってきておくれ！
———— C. 727。おそらく1890年の作品。Daniel S. Rankin. *Kate Chopin and Her Creole Stories.* Philadelphia, 1932［以下、Rankinと表記］に初出。

(3)　永遠に続く歌　The Song Everlasting

鳥たちがそれを語り続ける　繰り返し繰り返し
　花々もまた　そうだ。
蜜蜂がぶんぶん唸り続けていた　クローバーの中で
　何時間も何時間も。
　目覚めよ、〈愛〉よ！

自然の声が何千もの言葉となってリンリン鳴っている。
　目覚めよ〈愛〉よ！
だから　私の魂が歌っている歌に　耳傾けよ。
　目覚めよ〈愛〉よ！
———— C. 728。1893年6月以前の作。セント・ルイス水曜日クラブの「互恵日——セント・ルイス諸作家との午後」の「計画表」(“program” for the St. Louis Wednesday Club’s “Reciprocity Day: An Afternoon with St. Louis Authors,” Nov. 29, 1899) 初出。初めの標題は “Life”, “Love Everlasting” であり、6行目の「何千もの」は「多くの」(“thousand” → “many”) になっていた。

(4)　あなたと私　You and I

何年経ったのだろう　私たちあなたと私が　歩いてから
星の降り注ぐ四月の空の下を、
あなたは当時若かった、私は今ほど年取っていなかった、
だからあなたは含羞(はにか)んでいたし、私はこんなに大胆ではなかった。
愛だったの？　私たちが感じたのは。人生？　私たちが生きたのは。
確かに青春酣(たけなわ)だった、でも　青春って与えられるのだろうか？
人生と愛の充実を。全きことこの上ないのは
生きることと愛することと薔薇が　甘美きわまりない時なのだ！
もう一度一緒に歩きましょうか　私たちあなたと私が
星のきらめく夏空の下を？

―――― C. 728。1893年6月以前の作。(3) と同じ初出。1行目と9行目の「歩く」が「ぶらつく」(“walk” → “stroll”) に、3行目の「今ほど」が「そんなに」(“not” → “scarce”) になっている原稿がある。

(5)　それだけが重要　It Matters All

些か多少なりとも健康が？
　それが何だろう！
些か多少なりとも富が？
　ばら撒く恵みだ！
しかし多少なりとも　あなた自身が呼び掛ける愛なら
　それだけが重要なのだ！

―――― C. 728–29。1893年6月以前の作。Rankinに初出。

(6)　夜どおし夢の中で　In Dreams Throughout the Night

夜どおし夢の中で、あなた、

あなたの声を私は聞いていた、
この上なく優しい愛と憧れが
喜ばしい言葉を一語一語担っていた。

夜どおし夢の中に、愛する人よ、
あなたの眼があったのです
そしてその眼の甘やかさの底に隠れているのを
私は読んだのでした　声なき祈りが。

おお、どのように私は　あなたの眼に答えればよかったのか、あなた、
私自身の眼でもってしか！
そしてどのように私の愛する声に　応えればよかったのか
答を与える調子でもってしか。
――――― C. 729。Cが初出。1893年6月27日作。

(7)　おやすみ　Good Night

おやすみ、おやすみ！
さようならにはしないでおこう、
今と幸せの間を　そなたと私の間を
往ったり来たりする日々のどの一日も、愛しいそなたよ、
暗い瞬間瞬間は　忘却の彼方だと判るだろう。

そなたの優しい眼に見入って
再びそなたの声を聞くまで　光は現われず
夜も明けないだろう、私には太陽は昇らない――
我がものにして我が最愛のそなたよ――おやすみ、おやすみ！

———— C. 729–30。作詩時期不詳。New Orleans *Times-Democrat* (July 22,1894) に "Good-By" の標題で初出。

(8) もしもいつの日か　If Some Day

もしもいつの日か　私が何気なく気儘に眺めながら
一瞬のうちにそなたの眼を誘惑するとしたら、
　あるいはもっとそれ以上に　もしも私が敢えて
私の指先をそなたの袖に置いたら
あるいはもっと大胆になって　そなたの浅黒い頬にのせたら、
　もし更に進んで　私がそなたの名前を
甘く迷わす調子で呼ぼうとして
柔らかな息遣いで低い囁きになるように
　したら　そなたにはそれが分るだろうか？

これほど微妙な意味はないのでは？　あのような眼で眺めても
触っても　あのような調子でも　なんら関わりが生れないのなら。
　それに依ってだけ
私はそなたに伝えられるだろうに　幾らかちらりとほんの幽かにだけ
私が敢えて観たり話したり夢見たりしないものについて。

———— C. 730。1895年8月16日作詩。Cが初出、初期の標題は "Then Wouldst Thou Know"（「それならそなたは知るだろうか」）。5行目が "Or, grown more bold, upon thy swarthy cheek" ではなく、"Should venture e'en to touch thy ..." の原稿がある。

(9) キャリーBへ　To Carrie B

あなたに挨拶されて　私はすっかり苦しくなりました。

私は長いことじっと考えて　嫌な思いをしながら推測するのです
何を表わすつもりだったのかと。

ああ　美しい奥様！　お分りになれませんか
高位の殿方から
私がいつも逃げているのが！
―――― C. 730。1895年秋作。Cが初出、初めの標題には "To Mrs. Blackman", "To Mrs. B――n" がある。

(10)　ハイダー・スカイラーへ　To Hider Schuyler

私は幾つもの希いを伝えます。
まず最初に言わせて下さい、「健康」だと。
(何度でも接吻を送ります！)
そして最後に私たちは　それを富だと呼ぶでしょう。
その他のものは――あなたは幾つか選ばなくてはなりません。
私は希いを数え上げるのが下手なのです。
私は幾つかをきっと失ってしまいそう――
でも私は　接吻を二倍にします！
―――― C. 731。1895年のChristmasに詩作。Cが初出。

(11)　葉巻の箱を持つ「ビリー」へ
To "Billy" with a Box of Cigars

これは疑問の余地なく
あなたの消化には相当良くないでしょう。
でもパワーズ夫妻は　私をお遣わしにはなりません
お説教をするようにとは。あの方たちは　私にあなたを

喜ばせて欲しいという熾烈な望みを示しただけです
今も常に限りなく
そして些かあなたを　うるさがらせたいのです
友人としての優しさでもって。
———— C. 731。1895年のChristmasに作詩。Cが初出。初めの標題は “To Billy with Cigars”。

(12)　R夫人に　To Mrs. R

私はあなたが　人々の出会う
　街路で　あからさまだとは知りません。
私たちは　女たちが話すように話すのです、告白しましょうか？
　私はあなたを　あまり知りません。
私はあなたが賭け事をし　不思議な呪文に感動したのだと聞いています——
　私にはあなたがよく判ります——
———— C. 731。1896年のChristmasに作詩。Cが初出。初めの標題は “To a Lady at the Piano—Mrs. R——n”。

(13)　夜を去らせよう　Let the Night Go

夜は去った、一年が昨日が、
わずかな時間を何度も私はこっそり盗んでは
我が魂の影の中に隠してきた
ついでの時に玩(もてあそ)ぼうとして。

夜を去らせよう！　一年を、昨日を！
私は過去から　ほんの一時間掬ぎ取ってきた、

快(こころよ)いものだ――しっかり保って玩ぶ
子供だましだ――ついでの時に。
――――― C. 732。1897年1月1日作詩。Cが初出。初めの標題は "The New Year"。7行目の "A pretty thing" が "A pleasing thing"（「喜ばしいもの」）になっている原稿がある。

(14)　たっぷり音楽がある　There's Music Enough

今日　森には音楽がたっぷりある
　おお、まあ！　おお、本当に！
〈愛〉を籠めて　彼と同じ古くからの歌を歌いながら
　私たちは生き、私たちは死ぬ！
しかし明日は　何百万マイルも彼方
世界が緑で　月が五月の時は。
――――― C. 732。1898年5月1日に作詩。Rankinが初出。初めの標題はこの詩の2行目の "O, Me! O, My!"。

(15)　狂気の恍惚　An Ecstasy of Madness

狂気の恍惚がある
〈三月の野兎〉が住む所には、
喜びの妄想は
激しすぎて語れない。

〈月〉は五月祭を祝いに行ってしまったし
〈太陽〉は遥かに遠い！
おお！　瞬き光る星と一緒にいても
何の役に立つのだろう！

この瞬間　手に手を取って
丘の頂(いただき)へ飛んでゆこう
それで近かろうが遠かろうが、
私たちは決して静かに立ち止ったりはしない

あるいは〈月〉は五月祭に出かけており
〈太陽〉は甚だ遠く離れていると判って
私たちは　ここで希い祈り続けるのだ
瞬き光る星に向かって。
―――― C. 732–33。1898年7月10日作詩。Rankinが初出。初めの標題は "A Document in Madness"。4行目の「激しい」"Wild" が「深い」"Deep" に、13行目の「あるいは」"Or" が「～まで」"Till" になっている原稿がある。

(16)　私は神が欲しかった　I Wanted God

私は神が欲しかった。天上を地上を私は捜した、
すると何と！　私は見つけたのだ　彼を　私の最も奥深い思索の中に。
―――― C. 733。おそらく1898年の晩い時期の作詩。Cが初出。この2行対句は、"Lines Suggested by Omar", "An Echo of the Rubaiyat", "A Memory of the Rubaiyat" などと題されている一群の詩の一部。[*Rubaiyat*は11世紀後半のペルシャ詩人Omar Khayyám の詩]

(17)　取り憑かれた寝室　The Haunted Chamber

勿論　語るのに素晴しい物語だった
堕落した美しい脆い情熱溢るる婦人についての。

偽りだったかも知れない、真実だったかも知れない。
それは私には全く何ものでもなかった——あなたにも大したことでは
　なかった。
でも　私たちの間にはお酒があり、あなたの喫ったばかりの葉巻から
煙の雲が立ち昇っていては　それはむしろ冗談だった
女が堕落した罪の問題とか　恥の問題とか
いうよりは、だから咎めるべきものは何もなかった、
あなたか私に見い出せる限りは、
唯　彼女は美しく、彼女には血の気があり熱烈に恋しているというだ
　けだった。
しかし　あなたが去ってしまい　明りが薄くなって
そよ風が月の蒼白い輝きとともに吹き込んでくると
遠く幽かな一人の女の声が　私には聞えてきた、
それは唯の咽び泣きで　言葉は全く語らなかった。
それは何かしら限りない暗闇の底から立ち昇ってきて
その震え戦く苦悶が部屋に満ち溢れた。
それでもその女は死んでいたので　否とは言えなかったが
しかし女たちは永遠にひいひい泣き叫ぶことだろう。
だから今　私は　一晩中夜通し耳を傾けなければならない
私にはどうしようもなかったあの苦しみに——
しかし女たちは永遠にひいひい泣き叫ぶだろうし
男たちは永遠に耳を傾け——溜息をつか——なければならないのだ。
———— C. 733–34。1899年2月の作詩。著者が『目覚め』の校正をしていた頃と思われる時期。Cが初出。16行目の「震え戦く」“tremulous” は “tremendous”「途方もない」と読むべきか［などと言うSeyerstedには、私［森田］は無論賛成しない］。

(18)　人生　Life

日光の跳ねかかる日、
幾らか霞ごもり　些か雨の降る日。
愛の光のどっと射す人生、
幾らかの夢と苦痛の一触れ。
幾らか愛してそれから死ぬこと！
幾らか生きて何故なのかは決して知らないこと！

―――― C. 734。1899年5月10日の作詩。Rankinが初出。原稿には標題がなかったので、ランキンが“Life”なる題を付けたのは、今は失われた草稿からその題を採ったのかも知れない。

(19)　何故なら　Because

そうしなければならないから　小鳥たちは歌うのです。
大地は春　新しくなります
そうならなければならないから――人間だけなのです
出来るからそうするのは
そして善悪の区別を知っていて
選ぶのです　そうしようと思うから――

―――― C. 734。1895年と1899年の間の作詩。多分後者に近い。Cが初出。

(20)　わが青春の友へ――キティへ
To the Friend of my Youth : To Kitty

必ずしも人生の全てではないわ
年月が滑り去ってゆく時ぴったりくっついているのは。
必ずしも愛の全てではないわ

最初から最後まで手を握り合って歩くのは。
芳しいライラックと新たに咲いた薔薇を
春が撚り合わせて造ったあの神秘に充ちた花輪なのよ、
それは素早かったのだわ——鎖が私の魂とあなたのそれとを最後まで
喜びにつけ悲しみにつけ　生涯しっかり結びつけるよりも。
———— C. 735。Rankinが初出。原稿には標題も作詩日付けもない。おそらく今は失われた草稿を権威としてランキンが1900年8月24日とその作詩時期を定め、その標題を付けたものだろう。

(1) の、本当に自分の生命まで必要とされるほど自分が求められるなら、喜んで死ぬが、そういう死ならさぞかし甘美だろうし、自分の愛を本当に必要とされるほどの幸福はない、という率直な、そして静かな激しい表明は、ショパンの小説の世界、特に、短篇「デズィレの赤子」"Désirée's Baby" (1893) や、代表作の長篇『目覚め』を知る者には、殊の他哀切に響くのではあるまいか。他者から「必要とされること」と「愛」とを巡る物語、省察の展開が、この作家の本領だったように思われるのだが、ここに訳出した20篇の短詩は、何らかの象(かたち)での「愛」の希求ではないか。

(2) のプシューケー (Psyche) は、言うまでもないがギリシャ・ローマ神話での、蝶の羽根をつけた美少女でエロス (Eros, Cupid) に愛された、霊魂の擬人化の形象である。プシューケーに託された思いは以下の詩にも形を変えながら尾を引いているようだ。**(12)** の「R夫人」は、初め、「ピアノに向かう貴婦人」と題されていたという。『目覚め』でエドナ (Edna) に、「芸術家というのは、危険をものともせず挑んでゆく勇敢な魂を持たなくてはならないものだ」[3] と諭すピアニストはレーズ嬢 (Mademoiselle Reisz) であった。夫の急死によって12年間の結婚生活に終止符を打った32歳のショパンは6人の子供を生み育てる女性で、エドナとは違ってセイ

ヤーステッドの言うように「完璧な妻であり母であった」(C. 29) が、その奥底では、たとえ無意識であったかも知れないが **(17)** の「取り憑かれた寝室」に見られるように、ショパンは、『目覚め』のヒロインと深く自らを同化させたのではないか。**(8)** の「私が敢えて観たり話したり夢見たりしないもの」を彼女のヒロインは語っているのではあるまいか。

ショパンにとって人生が、嵐に揉まれたり泥沼に喘いだりしない **(18)** のようなものだったら、彼女は幸せだった。ショパンは **(16)** のように、「思索の中に」神を「見つけた」のだろう。それで『目覚め』の最後を、「機械仕掛けの神」(*deus ex machina*) の登場——としか言いようのないエドナの入水自殺だ。それほど唐突で、同情ならともかくおよそ共感出来ないヒロインの振舞いなのだから——で締め括ったのに相違ない。

ショパンの20篇の詩は、いずれも掌篇には違いないながら、彼女の小説世界の扉を別の角度から開いてみせる小さな鍵、といったら言いすぎだろうか。詳細については今は触れないでおくが、熟視してみたい詩群である。彼女の詩は、豊かな麦畑であるショパンの世界の落穂にすぎないだろうが、彼女の世界に新たな光を当てる鍵になりそうな落穂とみえる。

注

1 Per Seyersted, ed. *The Complete Works of Kate Chopin.* Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1969, 1997. 本稿ではCと略記し、数字はそのページ表示。

2 Daniel Rankin. *Kate Chopin and Her Creole Stories.* Philadelphia: University of Pennsylvania, 1932.

3 "The artist must possess the courageous soul that dares and defies." (C. 1000).